

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：41201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530690

研究課題名(和文)現代農村の新規就農者と若者集団：モノグラフとイシューアプローチによる生活過程分析

研究課題名(英文)The agricultural newcomer and the youth group: 'the Living Process' analysis from monograph and issue approach method

## 研究代表者

三須田 善暢(Misuda, Yosinobu)

岩手県立大学盛岡短期大学部・国際文化学科・准教授

研究者番号：10412925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：近年Iターン青年ら新規就農者層の重要性が注目されている。本研究では新規就農者層の生活過程の諸側面を把握した。(1)新規就農者は、ある年月をへると一戸前として村落「規範」への同調が強く期待される。(2)新規就農者らがつくる団体は、一種の「社会運動」としての側面をもつものの、そこでの公共性は農村集落との関連が薄い。(3)新規参入者が地元のイシューに大きく踏み込んだことを契機に、これまでの村落と就農者との緊張関係が解消し、村落へ一層受け入れられていった。

研究成果の概要(英文)：The importance of "I-turn" agricultural newcomers is receiving attention in recent years. This study investigates some aspects of the lives of agricultural newcomers. Some findings are as follows; 1) After a certain time, agricultural newcomers will strongly be expected to conform to the village "norm." 2) This agricultural newcomers group emphasizes public activity through "social movement," although this public face has a weak relationship with the local farm villages. 3) The strain between the conventional residents and the agricultural newcomer is dissolved and the newcomer is accepted still more into the village as the newcomer comes to take part in the local problems intensively.

研究分野：農村社会学

キーワード：Iターン 庄内 農村

### 1. 研究開始当初の背景

限界集落に象徴されるように、現在日本の村落を如何に維持存続させていくかの方策が問われている。つまり、農業のみならず村落社会の「担い手」の存立構造をこそ考察することが課題となっている。そのために、将来の担い手である後継者である若者世代およびIターン者の動向を考察する必要が求められている。

後継者問題については、現存・他出双方の子どもへの聞き取りから他出子が戻ってくることの割合が高いことが実証的に究明されている。しかし、他出子等に注目する研究は大変重要であるものの、嫁や他出子だけに期待することにも限界がある。それとは別個に、現在居住している青年層とその共同性に注目することはいまだ意味があり、また以前のそれとの性格変化をこそ捉えねばならない。くわえて、その象徴的意味、新しさから、Iターン者に注目することは大きな意味がある。Iターン者らがかかわる出来事(イシュー)から見えてくるものは大きく、そこに注目することから、現在の村落の性格を逆照射することにもなるのである。

### 2. 研究の目的

#### (1) 就農者と村落社会との関係変化：

新規就農者が村落に定着していくにあたっての、関係が変化する過程を綿密に描き出し、村落社会との緊張関係を把握するなかから、そこに今日の村落社会の特性を見出すとともに、円滑な定着のための条件を示唆的に把握する。具体的には研究者が継続的に調査をしてきた山形県遊佐町の集落を対象とする。

#### (2) 新規就農青年のネットワーク形成過程と特性把握：

新規就農者らが独自におこなう新しい活動に焦点をあて、それらの活動の特徴を描き出し、村落社会/地域社会との緊張関係をつぶさに把握する。具体的には、山形県下の新規就農者が設立した「新農業人ネットワークやまがた」を対象に、彼らのネットワークの形成過程と主たるメンバーの集落における社会関係、および既存の「若者集団」の社会関係との対比をおこなう。それを通じて地域にとっての新規就農者の意義/機能(さらには限界)を分析する。

#### (3) 環境問題をめぐる「若者集団」ら集落住民の反対運動の過程および構造分析

ある「イシュー」に対する関連諸アクター(=青年層、Iターン者、よそ者(支援者)、村落定住者)の対応を調査するなかから、彼らの相互認識の「ズレ」およびお互いの「信頼」構築/変容の状況を把握する。具体的には鳥海山における採石問題をめぐる反対運動(森林伐採と汚水問題)を参与観察する。そのうえで、運動の構造を描き出し、村落および「若者集団」の現代的特性を逆照射する。

### 3. 研究の方法

本研究は、これまで中心的フィールドとしてきた山形県庄内地方の集落と山形県の新規就農者団体を主たる対象として、モノグラフ法および「イシューアプローチ」とよばれる手法により参与観察と半/非構造的インタビューをおこない、現代の「若者集団」、Iターン青年層らがおこなう活動に着目し、相互作用過程を把握するなかから、現在の「若者集団」とそのネットワーク、および村落社会の性格と構造・課題を明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) 新規就農者の定着過程において障壁とみなされてきた村落は、村落内集団への溶け込み如何によって資源ともなりうるとの指摘がされてきた。しかし、新規参入者が村落に入り込むにつれ、これまで後見人的な存在であった重要人物(村落運営の中心的担い手)らとの関係性に多くの変化が生じ、彼らから「問題」視されるようになってきている。その過程を詳細に追うなかから、その「問題」があらわれてきた理由を考え、そこに示唆される現代村落の特性を把握しようとした。その結果次のことが明らかになった。参入者の経営規模が拡大し相当程度の信頼を獲得すると、ほかの住民と同等に見られるようになる。この段階で村落「規範」への同調がより強く期待されるようになるが、しかし、参入者は以前の役割期待をもって行動していたため、これまであれば問われなかった行動も「問題」視されるように変化していたのである。この村落「規範」とは、一戸前としての村入りを選択した成員に対して要求される、村人相互のつきあい方および村内諸役割の引き受け方・こなし方に関わる当為則とまとめられよう。また、このように生活面での重要性が多く関わっていることに、現在の村落の特性の一端が現われていると思われる。

(2) Iターンなどの新規就農者は、「自分自身の確固とした宇宙」をつくる傾向が強く、個性的な人間が多い。新規就農者たちによる助け合い・直売・ボランティア活動を中心とする「新農業人ネットワークやまがた」にもそうした人間が多い。そうした彼らがこうした団体を結成し活動を続けてきたのは、販路を確保するという経済的理由にくわえ、地域と密に溶け込み難いゆえに同じ境遇である仲間の協力を必要としたからでもあった。この助け合いの精神と、自らの経営を単なる自己利害のためにとどめたくないとする志向があいまって、引きこもり・障害者支援や高校生の就学援助、環境保全、震災ボランティア、独自の就農支援企画等の「公共性」の強い活動へと向かわせていった。別言すれば、ある意味で「社会運動」としての側面を強く持ったものへと進展していったのである。彼らの活動は、生活のためであると同時に遊びの要素と「夢」を含んだ側面が強く、それが公共的なものと結びつきあらわれている。しかし、彼らが述べ志向する公共性は、現時点

では農村地域（集落）との関わりが薄いものにとどまっている。

(3)山形県遊佐町では、農民による全町的な環境保護運動が長らくおこなわれてきた。そこにおける、業者による岩石採取活動に対する地元部落・関連団体の反対運動の展開過程をたどるなかから、関連諸アクターの利害の絡み合いを丁寧に紐解くことにより、「地元」の性格づけの変化を明らかにし、反対運動が全町的なものにならず、また関連部落相互のまとまりが強まっていない現状を分析し、「地元」の論理を明らかにした。

そこにはまず大きくは、法的正当性の点から行政の対応が弱いということが関与している。くわえて首長の態度も強く関わっている。町外資本で町と利害関係が薄い業者ということも、業者の強圧的な姿勢の一因であった。そうしたことから反対運動は活発になったものの、しかし、運動の当初から部落の違いによって取り組みの温度差があった。そのことが、今日においても、近隣部落相互で結束を高める際に悪影響を及ぼし、全町的なものになることを阻害している。

さらに、反対運動組織の構成員拡大による当事者性の希薄化と、「地元」の代表性が反対運動組織から町役場へと入れ替わってしまったことも、運動が全町的に進展しなかった大きな要因である。だがここで、当該部落でのよそ者たる新規就農者が運動のリーダーシップをとったことが停滞した運動を動かした。そこには、親族関係等で利害が複雑な代々の住民よりも、しがらみのないよそ者を前面に据える方がよいという部落の「戦略」もあったといえよう。換言すれば、ここに「地域の主体性」が現われているといっていいたいだろう。またこの過程をつうじて新規就農者自身の評価は高まり、これまでの緊張関係は解消し、村落へ一層受け入れられていった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

三須田善暢、2015、新規就農者集団の展開過程とその特質 新農業人ネットワーク山形の活動を事例として、社会学年報、44、査読有(掲載決定)

三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也、2015、土屋喬雄「石神調査ノート」と有賀喜左衛門モノグラフの比較検討、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集、17、119-23、査読無

三須田善暢、2014、新渡戸稲造農業論の性格と日本農村社会学への示唆、社会学年報、43号、107-17、査読有

三須田善暢、2014、地域振興と有機農業の意義、土と健康、42(4)、16-7、査読無

三須田善暢、2013、調査報告 パラグアイにおける伊藤勇雄一族(3) イグアス移住地での生活と意識、総合政策、15(1)、81-9、査読無

三須田善暢、2013、調査報告 パラグアイにおける伊藤勇雄一族(2) イグアス移住地での生活と意識、総合政策、14(2)、193-209、査読無

三須田善暢・林雅秀・高橋正也・庄司知恵子、2013、資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート(五) アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて、総合政策、14(2)、211-24、査読無

三須田善暢、2012、調査報告 パラグアイにおける伊藤勇雄一族(1) イグアス移住地での生活と意識、総合政策、14(1)、55-65、査読無

高橋正也・三須田善暢・庄司知恵子・林雅秀、2012、資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート(四) アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて、総合政策』第14(1)、67-84、査読無

林雅秀・高橋正也・三須田善暢・庄司知恵子、2012、資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート(三) アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて、総合政策、13(2)、171-90、査読無

〔学会発表〕(計5件)

三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也、2014、石神調査再考：土屋喬雄の調査ノートを中心として、第62回日本村落研究学会大会、2014年11月1日、岩手県宮古市グリーンピア三陸みやこ

Misuda, Yosinobu, Hayasi, Masahide, Syozi, Tiekou, Takahasi, Masaya, 2014, Reconsideration of Isigami Research By Aruga Kizaemon: Based on the Tutiya Takao's Field Notes, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014.7.17, Pacifico Yokohama, Japan

三須田善暢、2013、環境問題をめぐる村落の論理および新規農業参入者との関係変化 山形県遊佐町における鳥海山岩石採取反対運動の事例から、第61回日本村落研究学会大会、2013年11月2日、福井県越前市生涯学習センター

三須田善暢、2012、戦前期日本における農村研究の再検討(1) 新渡戸稲造の所論

から、第 85 回日本社会学会大会、2012  
年 11 月 4 日、札幌学院大学

Misuda, Yosinobu, Yoshino, Hideki,  
2012, Current-state and problems of local  
newcomers in japan: a case study at Tono  
City, Japan, XIII World Congress of Rural  
Sociology, 2012.8.4, Polo Universitario  
Ajuda (I.S.C.S P.), Lisbon, Portugal

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三須田 善暢 (MISUDA, Yosinobu)

岩手県立大学・盛岡短期大学部・准教授

研究者番号：10412945